

## 思いやりの教育

2023.5.15

野田中学校に来て3年目になる。機会あるたびに、生徒や保護者に言い続けている言葉がある。「思いやり」である。入学式の校長式辞、卒業式の校長式辞には入っている。だが、始業式や終業式の話では、ほとんど触れていない。校長通信には、たまに出てくる。保護者会では言っている。学校評議員会でも言っている。こう考えると、しつこくない程度に言い続けているということがわかる。

8年前に校長になったときから、一貫して「思いやり」の大切さを説いてきたわけではない。徐々にそうなった。常に、「一番大切なものは何か」と自分に問うてきた結果が「思いやり」であり、野田中学校に来るタイミングで定まったというわけである。

勉強ができる、運動ができる、何が得意、性格が明るいなど、人にはいろいろあるが、「思いやり」の心があれば、それでいいのではないかと考えるようになった。相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量ることである。相手のことを思い、気遣うことである。それができれば、人として十分なのではないか、そう思うようになった。

理想論を述べる。「思いやり」の教育が徹底できれば、紛争や戦争の相手国の人々の苦難を思い、悲惨な紛争や戦争を避けたいのではないか。人間には、他人を思いやる自然な傾向が生まれながらあると言う人もいる。

この10数年の間で、居ても立っても居られなくなったことが二度ある。一度目は、東日本大震災のときである。これは、人として現地に行かなければならないという使命感のようなものが、体の奥底から湧いてきた。だが、一つの学校を守る教頭先生としては、実際に行動を起こすことはむずかしかった。二度目は、ウクライナである。テレビを見ていて、自分も何かをしなければならぬ、自分にできることはないのかと考えてしまった。だからといって、急に姿を消して、現地に向かっていたら、それはそれで大問題である。

今の自分にできることは何か。「思いやり」の教育ならば、いくらでもできる。ますます、思いやりの大切さを感じてきた。思いやりは大切ですよという話をするのは、そんなにむずかしいことではない。そうではなく、生徒が「思いやり」の大切さに気づくようにしなければならない。教える、与えるではなく、気づかせる、引き出すである。道徳の授業のようなものである。道徳の内容は万国共通のものがあろう。各国で道徳教育がきちんと実施されることも重要なことである。

今の教育は、やるべきことが多い。しかし、削ぎ落して、絞りに絞って、これだけはとなったら、残るのは何か。それが「思いやり」である。